

6月

もう語るべきものなどない

ただ、雨が降り
地面がその水を吸い込み
むせ返るような蒸気を吐き出す
そのようなプロセスにおいて
美もなく、官能もなく
あらゆる感情を埋没させ、弛緩する
ただ、まがい物の個室に閉じ込められた幻滅が
次第次第に逃走へと醗酵されてゆくのをひりひりと感じる

生活に敗北する
ああ、そのことこそ空しさの極限だ

あの洗濯物の吊り下げられたヴェランダを見るがいい
タオルならまだしも
下着やら、トレーナーやら、靴下やらが
臆面もなくゆらゆらと風に揺れている
そうしたものを目の前にしつつ
モーツァルトを垂れ流す俺こそ、くそいまいましい

「死にませんか？
私と死にませんか？」

ふん、そんなお誘いは尚更興ざめだ
快楽はどこにある？
ああ、どこにある？

「殺せばいい、
その快楽を味わってみろ」

ふん、そのどこに快楽がある？
くるくると踊りまわるほうがまだましだ

時代とともに
科学や文明の多様化に比例して
人間そのものの生も、感情も

高度に多様化するなどという迷信に食い尽くされてきた、と
誰もが気づき始めている・・・

それなのに、この俺ときたら
このじめじめとした大気の中で
俺は思い焦がれている
ただ、じたばたと思い焦がれている

(2005.6.22)